広報かみす
Kamisu public relations
2024年
2/1
No.407

神栖ディスカバリー File 08

特集

組子細工と文様の世界

精緻を極める職人の技

Pick up

確定申告……P6
会計年度任用職員募集……P12
パブリックコメント募集……P13
市営住宅入居申し込み……P15

欄間や衝立などに施される伝統技術の組子細工。職人が細い木片を組み上げていくと、そこに広がったのは文様の世界でした。

AR 広報かみすが動き出す
【COCOAR】アプリをダウンロードし表紙にスマートフォンをかざしてください。詳しくは18ページ
【COCOAR】

神栖ディスカバリー File 08

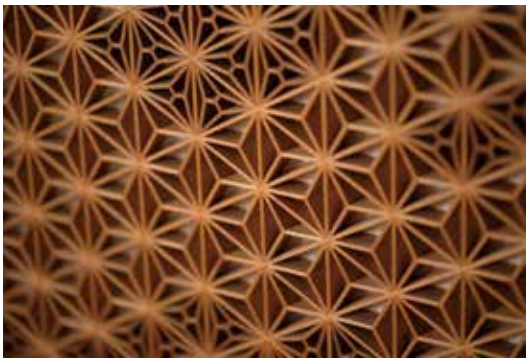
特集

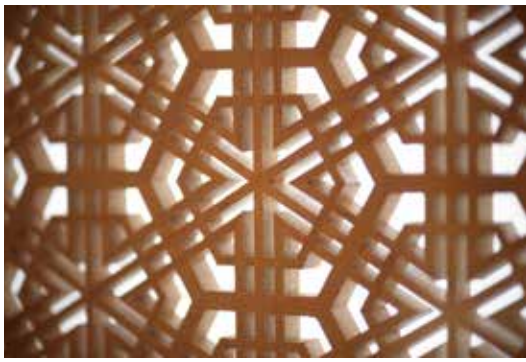
組子細工と文様の世界

精緻を極める職人の技

組子細工の衝立を仕上げた渡会建具店3代目渡會利一さん（右）と4代目誠俊さん（左）

細く削った木材だけを使い、美しい文様を生み出す組子細工。神栖市には、その最高水準の技術を持つ建具職人がいます。精魂込めて作り上げる思いに迫り、守り伝えていきたい貴重な伝統技術を見つめ直します。





日本一に輝いた職人技

皆さんは、組子細工を間近でじっくり眺めたことがありますか？　組子細工とは、釘などを使わずに、細い木片を組み合わせて幾何学文様を生み出す木工技術です。昔から障子や欄間などの装飾として用いられてきました。今回は、その技術を代々継承してきた堀割地区の渡会建具店を訪ねました。

母屋の和室に案内されて目に飛び込んできたのは、間仕切り戸、欄間、衝立などに施された見事な組子細工の数々。精緻を極めた美しさに圧倒され、一瞬にして職人技の奥深さに魅了されました。

それらを指差しながら、「その組子を作ったのは25歳のとき。もう46年も前だね」と柔和な表情で話してくれたのは、渡會利一さん（3代目）と誠俊さん（4代目）親子です。2人の組子細工の腕前は、国内でも高く評価されています。父の利一さんは、平成5年の技能グランプリ（第12回一級技能士全国技能競技大会）で日本一に輝き、労働大臣賞を同時受賞。平成18年には卓越技能者「現代の名工」として表彰され、さらに平成21年に黄綬褒章を受章しています。長男の誠俊さんも、建具技術の最高峰を競う全国建具展示会に出展し、平成14年に上位入賞を果たしました。その作品には組子で最も難しいとされる「干網」という技法が使われ、扇型に広がる網目が流れるような曲線を描き出しています。

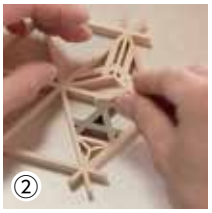
さまざまな作品を見るうちに、建具という実用品に手の込んだ組子細工が加わることで、まるで芸術品のような美が創造されることを実感しました。

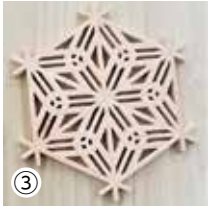
厳選した木材を精巧に組み上げる

一体どのようにしてバラバラの木片から文様を作り上げていくのでしょう？　誠俊さんが目の前でコースターを組み込む作業を見せてくれました。細い木片には、すでに何か所も溝が掘られています。

まず、15センチほどの木片を組み立て、6つの正三角形で6角形の地組を作ります。この地組は三ツ組手と呼ばれる形です。次に、三角形で仕切られた中に〝葉〟と呼ばれる小さなパーツをはめていきます。微妙に角度を調整しながら指先に力を加えていくと、すっと収まる瞬間がきます。その作業を繰り返して6つの三角形が全部埋まると、優美な桜の文様が姿を現しました。

木片が接する部分には髪の毛1本ほどの隙間もなく、指先で撫でてみると凹凸がなくてすべすべの手触り





①②6角形の地組を作り、葉と呼ばれる小さなパーツをはめる
③でき上がった桜文様のコースター

①手作業で地組にパーツを一つ一つはめ込む　②カンナでパーツに微妙な角度を付ける　③方眼紙に文様をデザイン。寸法の計算も書き込まれている
④特殊なカンナで溝を掘る　⑤美しい文様の世界が生まれる

です。これだけ精巧に作るとなると、まず良質な木材を見極めることが重要なのだと利一さんが教えてくれました。

「よく使うのはヒノキ、ヒバ、ホオノキ、神代杉です。柾目がきれいで、反りがなくまっすぐで、適度な油分がある最高級の木材。魚にたとえればマグロの大トロだね。だから値が張って、障子の桟1本ほどの木材が仕入れ値で何千円もするんですよ」

木材の中でも特に希少なのが神代杉。これは、長年土の中に埋もれていた杉を掘り起こしたもので、深みのある黒色が特徴です。白木と組み合わせるとコントラストが際立ち、組子細工に多彩な表情を与えてくれます。

細かい作業を延々と積み重ねて

さあ、次は工房で一連の工程を見せてもらうことにしました。まず、方眼紙に文様をデザインすることからスタート。伝統的な文様をどう配置し、何種類もの文様をどう組み合わせるか、職人のセンスが問われます。次に、仕上がり寸法に合わせ、地組や葉のサイズを計算します。それを元に設計図を作り、大きな板に実寸大で下書きをします。

そこまでの下準備ができたら、いよいよ木材の加工です。ノコギリや自動カンナ機を使い、必要な長さや厚みに切り分けます。もし干網のような曲線のパーツが必要な場合は、木材をお湯につけて曲げる作業も加わります。次にその部材に印をつけ(墨付け)、地組や葉のパーツとなる細木を切り出し、特殊なカンナで溝を掘ったり断面に角度をつけたりします。

こうして材料が揃ったら、ようやく組み込み作業となります。作るものが襖一枚分もの大きさとなると、先ほどのコースターとは比べ物にならないくらい複雑で神経を使います。

「父や祖父から、組子細工で一番大事なのは正確さだと教えられてきました。0・1ミリズレると最終的には大きなズレが生じてしまいます。また、たとえ地組が上手くいったと思っても、実際に何か所か葉をはめ

いくつもの道具を使い分ける

込んでみるとサイズの合わない場所が見つかることもあるんです。そうなると途中で修正はできませんから、また一から全部やり直しです」と話す誠俊さん。一つの作品を完成させるには、気が遠くなるほどの根気が必要です。

工房では、道具の数にも驚かされました。基本はノコギリ、カンナ、ノミ。それぞれ大きさや種類が多様で、たとえば指1本ほどのミニチュアサイズのカンナや、角度を調整できる歯が2つ付いたカンナなど珍しいものがたくさんあります。また、狙い通りの角度に木材を削るための台座など、手作りの道具もあります。

身近なコースターで魅力を伝える

さて、組子細工の起源は古く、飛鳥時代までさかのぼります。まさに日本が誇る伝統文化です。大正中期に創業した渡会建具店では、4代にわたって技術を受け継ぎ磨きをかけてきました。しかし、技術の継承が難しい時代になったと利一さんは言います。

「住宅事情が変わって建具職人の仕事が減り、それに伴い組子細工を入れる場所もどんどん少なくなっています。全国建具組合連合会の会員数は最盛期の4分の1以下、茨城県連の会員数も44事業所まで減ってしまいました。そういう状況をどうにかしたいと思って取り組んだのが、コースター作りです」

実は以前から、小・中学生に組子コースターを組み立ててもらう催しをしており、参加した子どもたちからは大変喜ばれているそうです。

また、渡会建具店で製作した飾り組子コースターは、神栖市ふるさと納税返礼品としても全国に紹介されています。文様は伝統的な桜亀甲（さくらきっこう）と胡麻柄麻葉（ごまがらあさのは）で、調度品として飾りたくなる逸品です。手に取って直に触れることのできるコースターを通して、組子細工を、もっと身近に感じてほしいという渡會さん親子の願いが込められています。

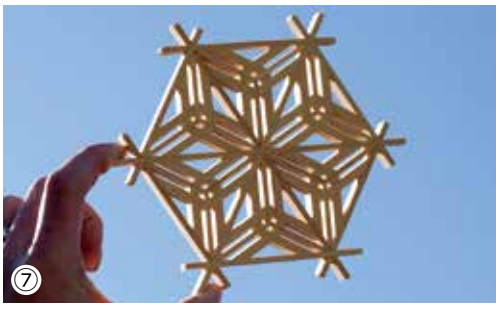
組子細工を見て知ってほしい

「一からすべて作り上げるところが、組子細工の面白さ。簡単な文様ではなく、どんなに手間がかかっても凝った文様に挑みたくなります。やっぱりみんなに〝きれいだな〟と思ってもらうには、それだけ手間をかけないとね」と語る渡會さん親子。穏やかな語り口ながら、揺るぎない職人魂が伝わってきます。

二人が手がける組子細工は、注文を受けてから現地で採寸し、デザインを考えて作り上げる一点物。一つひとつに最高水準の職人技が注がれており、できあがるまでに数か月かかることもあります。仕事をしていて一番うれしい瞬間は、完成した組子細工を見て喜んでもらえたときだといいます。「去年、お客様から玄関正面の間仕切り戸に組子細工を入れてもらいたいと注文をいただきました。図面を見て頭では分かっていても、実際に家に取り付けてみると期待以上だったのでしょうか、〝一目見て驚いた〟と電話口で大喜びしてくれましてね。仕事をさせてもらって、代金をいただいて、おまけに感謝されるのだから最高ですよ(笑)」

改めて組子細工の魅力を利一さんに聞いてみると、「日が当たると文様が浮き出るように見え、夜に照明をつけるとシルエットが美しく、暮らしの中で多彩な表情を楽しめるところ」だそうです。また「一人でも多くの市民の皆さんに、組子細工を見て興味を持っていただけたらありがたいです」とも語っていました。

皆さんの周囲で、または訪れた先などでも、建具のどこかに組子細工が施されているかもしれませんよ。見つけたときは、ぜひじっくりと眺めてみてください。



⑥木材や加工用の機械が並ぶ工房　⑦飾り組子のコースターを空に透かして見る　⑧文様のシルエットが美しい